

鏡の少女

足利將軍時代に南伊勢の大河内明神の神社が頽廢したところ、其國の大名北畠公は戰爭や他の事情の爲めに、其建物の修繕を圖ることが出来なかつた。そこで、其社を預つて居た神官の松村兵庫といふが京都へ行つて、將軍に信用されて居ると知られてゐた、大大名の細川公に助力を求めた。細川公は其神官を懇切にもてなし、大河内明神の有様を將軍に言上しようと約束した。然し、兎に角、社殿修理の許可は相當な取調べをし、又、可也手間を取らねば與へられまいと云つて、事が取極められる間、都に止まつて居るやうにと松村に勧めた。其處で松村は家族の者を京都へ呼び寄せて、昔の京極の處に家を一軒借りた。

この家は、綺麗で廣かつたが、長い間、人が住まずに居たのであつた。不吉な家だと世間で言つて居つた。その東北側に井戸が一つあつた。そして、何んとも原因知れずに、その井戸で溺死した前の借家人が幾人もあつたからである。然し松村は、神官のことだから、悪靈など更に恐れず、直ぐと、この新居で居心地よく暮した。

その年の夏大旱魃があつた。幾月も一滴の雨も五畿内に降らなかつたので、川床は涸れ、井戸は干て、この都にさへ水の拂底を見た。ところが、松村の庭の井戸は相變らず水が殆んど一杯で、

その——非常に冷たく清く、微かに青味を帯びて居た——水は泉が供給するらしく思はれた。暑い季節の間、町の方方から水貰ひに多勢人が來たが、松村は欲しいだけいくらでも人に汲ませた。それでも水の供給は減るやうには見えなかつた。

ところが、或る朝、近處の家から水汲みに來た、年若い下男の死骸が、其井戸に浮んで居るのが見つかつた。自殺の原因は何一つ想像出來なかつたので、松村は、其井戸に就いての面白からぬ話を數數想ひ出して、何か眼に見えぬ怨恨の業ではないか知らと疑ひ始めた。そこで、其まはり垣を造らせようと思つて、其井戸を檢べに行つた。すると、獨りで其處に立つて居る間に、水の中で、何か生きて居る物がするやうに、突然、物が動くので驚いた。其動きがやがて歇むと、見た處十九か二十歳ぐらゐの若い女の姿が、其靜かな水面に明らかに映つて居るのが見えた。切りとお化粧をして居るやうで、脣へ紅をさすのが判然見えた。初めは其顔は横顔だけ見えてゐたが、やがてのこと、その女は松村の方を向いてにつこりと笑つた。直ぐに其心臓に異常な衝動を感じ、酒に酔つたやうに眩暈がして、——月の光りの如く白くまた美しく、いつも次第に美しさを増すやうに思はれ、また闇黒へ彼を引き下ろさう、下ろさうとするやうに思はれる、そのにこりとした顔だけが残つて、一切の物が暗くなつた。だが、彼は一所懸命に意志を取り戻して眼を閉ぢた。それから眼を開けて見たら、その顔は消えて居り、世は明かるくなつて居た。そして自分分は井桁から下へうつむいて居ることを知つた。あの眩暈がもう一秒續いたなら——あのまぶしい誘惑がもう一秒續いたなら、二度と日の目を見ることは出來なかつたことであらう。……

家へ歸ると、皆の者にどんな事があらうと、その井戸へ近寄らぬやう、どんな人にもその水を汲ませぬやう命じた。そして、その翌日、丈夫な垣をその井戸のまはりに造らせた。

垣が出来てから一週間許りすると、その長の早夫が風と稲光りと雷——全市が、その轟きで地震で顛へるやうに、ふるへたほどの恐ろしい雷——との伴うた大風雨で絶えた。三日三晩その土砂降りと電光と雷鳴とが續き、鴨河は未だ嘗て見ぬほど水嵩が増して、多くの橋を流し去つた。その風雨の三日目の夜、丑の刻に、その神官の家の戸を敲くものがあつて、内へ入れて呉れと頼む女の聲が聞えた。が、松村は井戸での事を思ひ出して、あぶないと思つたから、その哀願に應ずることを召使の者共に禁じた。自分で入口の處へ行つて、から訊ねた。

『誰れだ』

すると女の聲が返事した、

『御免下さい！ 私で御座います——あの彌生で御座います！……松村様に申し上げたい事が、——大切な事が御座いまして、何卒、開けて下さいませ！』……

松村は用心して戸を半分開けた。すると井戸から自分を見てにこりと笑つた、あの美しい顔が見えた。しかし今度はにこにこしては居ないで、大變悲しきやうな顔をして居つた。

『私の家へは、はいらせぬ』と神官は呟鳴つた。『お前は人間では無い。井戸の者だ。……何故、お前はあんなに意地悪く人を騙して殺さうとするのだ？』

その井戸の者は珠のちりんちりん、いふやうな調子のいい聲（タマヲコロガスコエ）で返事した。

『私の申し上げたいと思ひますのは、その事に就いては御座います。……私は決して人を害ねようとは思つて居りません。が、古昔から毒龍があの井戸に棲んで居りました。それがあの井戸の主で御座いました。それであの井戸には水がいつも一杯にあるので御座います。ずつと前に、私はあの水の中へ落ちまして、それであれに仕へることになつたので御座います。自分がその血を飲むやうにと、私に、人を騙して死なせるやうにさせたので御座います。が、今後は信州の鳥井ノ池といふ池に棲むやう神様が、今度、御云ひ附けになりました、神様はあれをこの町へ二度と歸らせてはやらぬと御極めになりました。で、御座いますから今夜、あれが去つてしまつてからあなた様のお助けを御願ひに、出て來ることが出來たので御座います。その龍が去つてしまひましたから、今、井戸には水が少ししか御座いません。云ひ附けて探させて下されば、私の身體が見つかると御座います。どうか、御願ひで御座います、早く私の身體を井戸から出して下さいませ。屹度、御恩返しは致しますから』……

かう言つてその女は闇へ消えた。

夜明けまでに風雨は過ぎ去つた。日が出た時には澄んだ青空に雲の痕も無かつた。松村は早朝、井戸掃除屋を呼びに遣つて、井戸の中を捜させた。すると誰れもが驚いたことには井戸は殆

んど干涸らびてゐた。容易く掃除された。そして其底に頗る古風な髪飾りと妙な恰好の金屬の鏡とが見附かつたが——からだ身體は動物のも人間のものも、何んの痕跡も無かつた。

だが、松村は此鏡が、その神祕の説明を與へはせぬか知らと想つた。そんな鏡はいづれも己の魂を有つて居る不思議な品物で——鏡の魂は女性だからである。その鏡は餘程古いもののやうで、鏡が厚く著いて居つた。が、神官の命で丁寧ていねいに、それを掃除させて見ると、稀なそして高價な細工だといふことが判り、その裏に奇妙な模様があり、文字も數數あることが知れた。その文字には見分けられなくなつて居るものもあつたが、日附の一部分と、『三月三日』といふ意味の表意文字とは見極はめることが出来た。ところで、三月は昔は彌生いやや（いや増すといふ意味）と云つたもので、祭り日となつて居る三月の三日は、今なほ彌生の節句と呼んで居る。あの井戸の者が自分の名を『彌生』と云つたことを想ひ起こして松村は、自分を訪ねた靈の客は、この鏡の魂に他ならぬ、と殆んど確信した。

だから、その鏡は靈に對して拂ふべき顧慮を以て、鄭重に取り扱はうと決心した。丁寧に磨きなほさせ、銀を著けなほさせてから、貴重な木でそれを容れる箱を造らせ、その箱を仕舞つて置く別室を家の中に用意させた。すると、その箱を恭しくその部屋へ置いた、丁度その日の晩に、神官が獨りで書齋に坐つて居ると忽然、その彌生が、その前へ姿を現した。前よりも、もつと美しいぐらゐであつたが、その美はしさの光りは、今度は清い白雲を透して輝く夏の月の光りの如く軟かいものであつた。頭低く、松村に辭儀をしてから、玉のやうな美しくい聲でかう言つた。

『あなたが、私の獨り住居を救ひ、私の悲しみを除つて下さいましたから、御禮に上りました。……私は、實は、御察しの通り、鏡の魂なので御座います。齊明天皇の御世で御座いました。私は百濟から始めてこちらへ連れて來られたので御座いまして、嵯峨天皇の時まで、御屋敷に住まつて居たので御座いますが、天皇は私を皇居の加茂内親王に御興へになつたので御座います。その後、私は藤原家の寶物になりました、保元時代までさうでるりましたが、その時にあの井戸へ落とされたので御座います。あの大戦争の幾年の間私は其處に置かれたまま人に忘れられて居たので御座います。その井戸の主は、元は此邊一帶にあつた大池に棲んでゐた毒龍で御座いました。その大池が、お上の命令で、家を其處へ建ててゐる爲めに、埋められましたから、その龍はあの井戸を我が物にしたので御座います。私はあの井戸へ落ちてから、それへ仕へることになりました、あれが無理に私に人を多く死なせるやうにしたので御座います。だが、神様があれを永久に追ひ拂ひになりました。……あの、私に、も一つ御願ひが御座います。私の前の持主と家柄が續いて居りますから、將軍義政公へ私を献上して下さいませんか、御願ひ致します。最後のこの御深切さへして戴けますれば、私はあなた様に幸福を持つて参りませう。……が、その上にあなた様の身に危ふいことがあることを御知らせ致します。この家には、明日から、おいでになつてはいけません。この家は壊れますから』……

そしてかう警戒の言葉を述べると共に、彌生は姿を消した。

松村はこの豫戒によつて利益を享けることが出来た。翌日、自分の家の者共と品物とを別な町へ移した。すると殆んどその直ぐ後に、初めのよりかもつと猛烈なくらゐる暴風が起こつて、その爲めの洪水で、それまで住まつてゐた家は流されてしまつた。

その後暫くして松村は、細川公の厚意によつて將軍義政に謁見するを得て、その不思議な來歴を紙に書いたものと一緒に、かの鏡を献上した。そして、その時鏡の魂の豫言が實行された。將軍はこの珍らしい贈り物を大いに喜ばれて、松村へ高價な贈物を與へられたばかりで無く、大河内明神の神殿再建に澤山の寄附金をされたからである。

*〔齊明天皇の治世は六五五年（紀元）から六六二年まで。嵯峨天皇は八一〇年から八四二年まで。百濟は朝鮮の西南部にあつた古の王國で、初期の日本史によくその名が出て居る。内親王は皇室の血統の方。昔の宮廷階級には高貴な婦人に二十五階級あつて、内親王は席次では第七階であつた〕

*〔幾世紀の間、天皇の好配と宮廷の貴女とは藤原家から選まれた。保元時代は一一五六年から一一五九年まで。ここに云ふ戦争は平家源氏間の、あの有名な戦争〕

***〔昔の信仰では湖水や泉にはいづれも眼には見えぬ守護者があつて、時に蛇又は龍の姿を取ると想はれて居た。湖水や池の靈は普通イケノヌシ即ち『池の主』

と云つて居た。此處ゆゑには『主』といふ名を井戸に棲む龍に與へてあるが、本當は井戸の守護者は水神といふ神である〕

*The Mirror Maiden. (The Romance of the Milky Way
and other Studies and Stories.)*

(大谷正信譯)